

『ウルシはとっても贅沢な木』(下)



写真1 ウルシノキ検定林

1 はじめに
 前回では、ウルシノキは日本には自生しておらず大陸から渡ってきた木であること、また、ウルシノキの特性や漆液の産出量と県内における気候(産地)との関係、さらにウルシノキの品種について報告しました。
 今回は、ウルシノキの優良系統の育成を目的に、昭和62年度から平成17年度にかけて実施した「ウルシ優良系統育成事業」の概要についてご

報告いたします。

2 事業の概要

浄法寺町の旧高等営農学園の跡地に、平成2年度から平成6年度にかけて分根苗、実生苗を植栽し、検定林(写真1)を設置(図1)するとともに、生育状況、漆液採取量等の調査をしました。

調査結果の一部は、当センター研究成果速報「ウルシの収穫(掻きとり)可能本数率の年次変化」、「ウルシの収穫期と収穫可能本数の年次推移」及び本誌の平成18年3月号に「漆は植栽後何年目で収穫できるか?」と題して既に公表しております。

3 分根苗の生育状況と漆液採取量

検定林の調査結果の一部をご紹介します。

なお、この報告は、前任者の取りまとめた資料をもとに、筆者が再度整理し直したものであり、当時のウルシノキの状態がどうであったのか、採取量に大きく影響する採取時間、天候等は自分の目で確かめておりません。したがって、分析の結果及び考察等に関する文責は筆者にあります。

先の検定林のうち、平成2年度に分根苗で同一系統を2本ずつ植栽し、平成15年に14年生で漆液採取量の調査をしたA-1ブロックの25系統50本の結果では、採取量が一番多かったのは、1本あたり355グラム、最低が25グラムと14倍強の開きがありました。そのうち、1本あたり採取量の多い上位5系統の採取量と直径をまとめたのが表1であり、反対に下位5系統をまとめたのが表2であります。

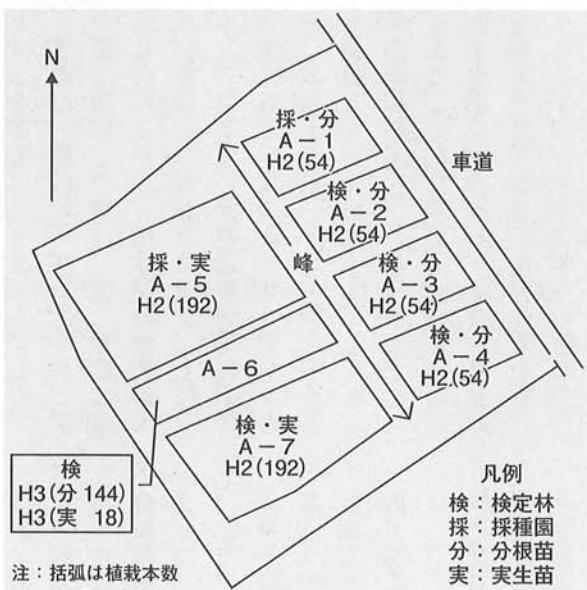


図1 検定林配置図

1と2の表を見比べてみると、上位と下位で重なる系統は

ありませんでした。採取量の多い系統は多く、少ない系統は少ない傾向があると言えるものの、同じ系統でも例えば系統2では、3倍ほどの開きがあり、同系統個体間の差が非常に大きいことが分かります。
 また、同じ試験地内のA-4ブロックの25系統36本(枯損による欠株のため)の上位5系統と下位5系統をまとめたのが、表3及び表4であります。1本当りの採取量は、最高が455グラム、最低が35グラムと13倍の開きがありました。また、上位5系統を見ると、系統14では個体間で6倍の、系統7では3.7倍の開きがありました。
 表3と表4と見比べると、A-1ブロックでは上位と下位で重なる系統はありませんでしたが、A-4ブロックでは、系統14が上位の5番目に記録されるとともに、下位の2番目に記録され、また、A-1ブロックで最も採取量の多かった系統1は、A-4ブロックでは最低の採取量を示すなど、変動の大きな結果となりました。
 さらに、A-1ブロックで上位に記録された5系統全てが、A-4ブロックに植栽されているものの、A-4ブロックでは上位に記録されず、反対にA-1ブロックで上位のもの

のうち1つの系統はA-4ブロックで下位に記録されるなど非常に複雑な様相を示しました。

4 実生苗の生育状況と漆液採取量

次に、実生苗で造成し、漆液を採取した57本の事例をご紹介します。採取時の樹齢や採取量及び直径の平均等をまとめたのが表5であります。

樹齢と直径や採取量との関係はA-5ブロックで見ると、採取年度が異なることから一概には言えませんが、樹齢とともに直径及び採取量が増加する傾向が示唆されました。

また、A-2ブロック、B-19ブロックでは、樹齢が12年生とA-5ブロックに比較して若いにも関わらず同等の直径生長を示しており、採取量も16年生を除いて高い値を示しました。

次に、平成17年度に16年生で漆液を採取したA-5ブロック20本の上位5本と下位5本をまとめたのが表6と7であります。20本全ての胸高直径の平均は12.20cm、採取量の平均は247.69グラムであります。

上位5本の平均は、11.96cm、407.66グラムに対し、下位5本の平均は12.82cm、136.78グラムと採取量で3倍ほどの開きがありました。この検定林で見ると、

上位と下位差は、分根苗の検定林は

ど大きな差ではありませんでした。

また、一般的にスギなどでは、実生苗で造成した林は、挿し木苗で造成した林よりは、個体間の変異が大きいと言われておりますが、上位5本と下位5本の採取量の平均の差は3倍であり、先のA-4ブロックの同一系統の6倍、3.7倍より小さな結果となっております。しかし、

その原因はよくわかりませんが、また、この調査で採取量調査を行った実生苗57本のうち、400グラムを越えたものが2本ありましたが、A-5ブロックの16年生の区にだけ現れました。そのうちの1本は677グラムと検定林中の最高を記録し、上位5本のうちこれを除いた4本の平均でも340グラム、20本の平均でも248グラムと分根苗の上位の5系統に比べても遜色なくむしろしのぐ結果となりました。

5 優良系統選抜の可能性

以上の結果を総合的に判断すると、分根苗では、漆液の採取量の多い系統と少ない系統があることは示唆されたものの、ブロックが変わると結果が異なるなど安定しておらず、分根苗による優良系統の選抜は困難であると思われました。

一方、実生苗によって造成したウ

ルシノキから採取した漆液量の結果は、概括的には分根苗に比較して思ったほど個体間の変異が少なく、分根苗の成績よりいいものと思われました。

したがって、生育の良好なウルシノキから種子を採取して苗を造成するほうが、種子の発芽法も確立していることから、経済的であり、合理的であると思われました。

6 おわりに

昔から林業では「適地適木」という言葉がありますが、漆を採るためには、前回の上の2でお知らせした植栽環境が、ウルシノキにとって正に「適地」であり、このように場所を極端に選ぶ、取扱に面倒な「贅沢な木」であると言えます。

しかしながら、適地に植栽すると14・5年(図2・3)で漆を掻くことができ、漆を掻いた後、秋に根元から伐採すると、翌年には萌芽が出てきて、苗木代、植栽費が掛らない経営上有利な木であるとも言えます。おわりに、本文がウルシノキの育成に幾らかでも役立つことを期待して筆を置くことといたします。

林業技術センター
首席専門研究員 小林 光憲

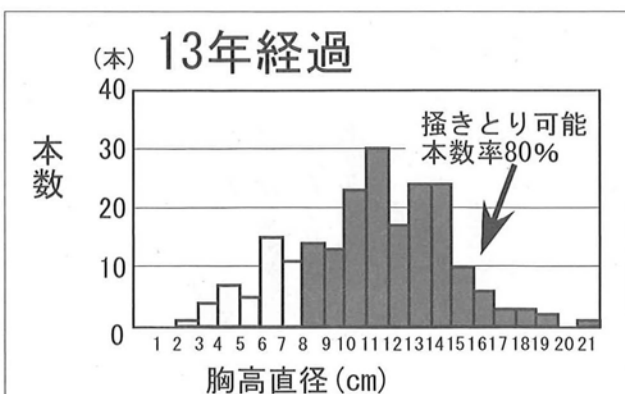


図3 13年次の掻きとり可能割合 (研究成果速報から引用)

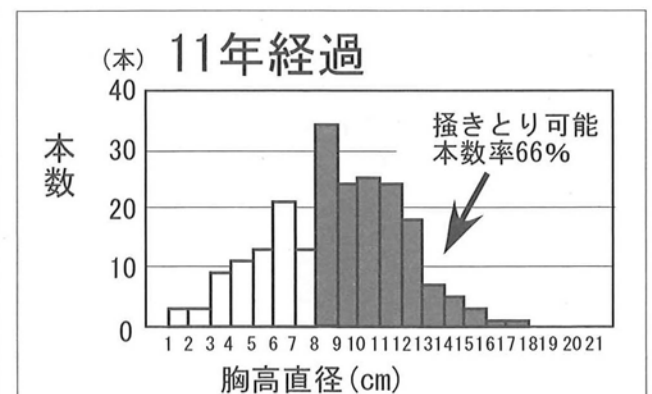


図2 11年次の掻きとり可能割合 (研究成果速報から引用)